川口の石仏

牛窪学

野の道を歩いて行くといろいろな物が目にはいってきます。春ならばタンポポやチョウ、夏ならば勢いよく伸びる雑草たち、秋の空には赤いトンボが飛びかい、冷たい風を避けるように足早に通る人の姿が見えると、もう冬。

別れ道に来ると地蔵が立っています。近くから集められた像や文字の馬頭観世音の群れ、忿怒相の青面金剛になぜか心が和みます。

川口の野の道を歩いてもまだかなりの石仏に出会うことが出来ます。古いものは元禄年間の造立（川口地域で最も古いのは元禄四年銘馬頭観世音・楢原）で、三百年近くも立ち続けていることになります。風雨に耐え、悪童たちのいたずらに耐え、廃仏毀釈などの嵐にも耐えて立ち続けてきました。

これらの石仏はいつ頃、どのようにして造立されたのでしょうか。今、私たちがよく見かける石仏の多くは江戸時代の造立になります。造立の講の担い手はほとんどが庶民であり、農民でした。

農民たちにとっては何よりも毎年の作物の出来具合が重要なことでした。作物の実りが悪ければ年貢を納めることが出来ません。自分たちの食べる物もなく、泣く泣く娘を売らなくてはならないこともあったでしょう。せっかく産まれた赤ん坊も育たず、死産も今の比ではなかったでしょう。そうならないように農民たちはどうしたのでしょうか。災害に強い作物をつくったり、新田を開発したり、水路をつくったりもしたでしょう。しかし、多くの農民に出来ることは神仏に祈ることしかありませんでした。それも寺の本尊のように立派な仏や神はいりません。天候の安定を日々の安泰を身近で祈る、自分たちの仏や神が必要でした。身近な石を使い、講中の人々が気軽に祈る、野に置かれたのはそれなりの理由があったのです。

このように石仏造立の目的のひとつに「作神」の意味があるのですが、もうひとつ「塞ぎ（ふせ）」の意味があります。

江戸時代、病にかかると大変でした。ちょっとした風邪が命とりになったことも多かったでしょう。疱瘡などが流行（はや）り、たくさんの人々が死んだ記録も残っています。作物に害を及ぼすもの、洪水・

地震・津波などの自然災害もなかなか防ぐ手段がありませんでした。こうした悪いことが村には入ってこないように祈る、村に入って来た悪いものが出て行くように祈る「塞ぎ」の意味も重要です。村境で防ぐ、村の信仰場で防ぐ、石仏が置かれている場所にも意味がある場合もあるのです。

農民たちは日々の安泰を願い、石仏に素朴な祈りを続けたのです。ところが、現代はどうでしょう。たまに不作や水不足になることもありますが、冷害に強い作物などどんどん改良されています。驚くなかれ土や太陽がなくても育つ、天候に左右されないバイテクの作物がつくられる世の中です。病気になれば薬を飲んだり、病院へ行けばいい、かなりの病気が治る時代です。自然の災害から身を守る為、大がかりな工事が続いています。

なるほど現代は「作神」「塞ぎ」を主な造立目的とした石仏に日日の安泰を祈ることは必要とされない世の中です。多くの人々が石仏に関心がなくてあたりまえの世の中です。それでは、石仏たちはもう無用の長物なのでしょうか。見る人の心を和ませるだけの物なのでしょうか。

いいえ、石仏は私たちにたくさんのことを教えてくれます。そのひとつが「造建の絶対年時」がわかることです。川口・滝ノ沢の地蔵の台石には「寛政元己酉年九月二十九日」と彫ってあり、この地蔵が西暦一七八九年に建立されたことがわかります。川口・十内入から滝ノ沢に向かう道沿いの青面金剛の左面には「享保十三申天十一月吉日」とあり、前述の地蔵より六十一年前（西暦一七二八年）の建立なのがわかります。次に信仰集団（講）の講名・所在地・講中の人名・人数・性別、時には階層や職業・年齢・指導者・石工の名などがわかります。上川・円福寺の地蔵には念佛講供養上下川口村・男女三十六人」とあります。フクトク下の地蔵の台石には「地□講・光明講・念佛供養・徳本講」とあり、いろいろな講の人々が集まっての造立なのがわかります。三つ目に造立の主旨・功徳（ご利益）願望・信仰の種別・行事の大要などもある程度、推測できます。（『日本石仏事典』　まえがき参照）このようないろいろな事を教えてくれる石仏たちが立っている路は多く、古道であったりします。石仏は人の目に触れない所にではなく、たくさんの人の目に触れる所に造立される事が多いのです。朝に夕に日々の安泰を祈るには、やはり身近な路傍が似合います。

さて、かって川口出張所で「川口の石仏」について講演した時、私は「川口地域は石仏では特徴のない地域です」と話しましたが、石仏に特徴がないとはどういうことなのでしょうか。どういう石仏が、どの位あれば特徴がないと言えるのでしょうか。「道祖神のふるさと」と聞くと、すぐに信州を思いうかべる方も多いでしょう。男神女神が仲睦まじく寄り添う姿にうっとりする方も多いでしょう。ところが、道祖神はどこにでもある石仏ではありません。信州・甲州・群馬・静岡東部・神奈川西部・新潟南部・山陰・会津に多く、その他の地域にはあまり見られません。川口地域にも一基し

かなく、八王子全体でも、南部の丘陵地域にしか見られません。全国的に見て多いのが地蔵・馬頭観世音・庚申塔だと言われています。これらの石仏はあって当然です。ですから、地蔵・馬頭観世音・庚申塔のうち、いずれかが非常に多い（全体の石仏の三十パーセント以上）か非常に少ない（五パーセント未満）かあるいは他の石仏が多い（十パーセント以上）場合には、はっきりした特徴があると言っていいでしょう。

次の一覧表は関東近辺の幾つかの市町村の悉皆調査を基に作成したものです。分類の仕方に多少違いがありますが、全石仏（神社奉納物・神名のない石祠などを除く）にしめる地蔵・馬頭観世音・庚申塔およびその他の石仏の中で最も数の多い石仏を調べたものです。各市町村発行の文献には道しるべを含んでいるので、川口地域も道しるべを含めてのパーセントです（一覧表には道しるべははいっていません）。これで見ますと、川口地域は八王子の他の地域と同様に地蔵の数が非常に多いのがわかります。三多摩の各市でも多いのは羽村町・多摩市の三十パーセント台で、近県でも三十パーセント台の市町村はわずかと見てよいでしょう。地蔵の多さに比べて馬頭観世音はかなり少ないのがわかります。三多摩各市の中でも最低の部類にはいるでしょう。近県で見ても群馬・茨城の平野の一部に馬頭観世音の少ない地域が見られるくらいです。どうしてなのか、農耕馬としてあまり飼っていなかったのか、街道が荷を運ぶには重要でなかったのかなど、これからの課題といえるでしょう。ともかく、関東甲信のどの市を見ても地蔵・馬頭観世音・庚申塔の合計が、五十パーセント近くには達しています。石仏としてみなさんがすぐに思いうかべる道祖神は数の上では意外と多くないものなのです。

次に江戸時代の初出の石仏を見てみますと、江戸に近い市では寛文年間に現われています。西多摩地域は約二十年おくれて出現しており、川口地域は西多摩同様、かなり遅い初出になります。石仏の宝庫の長野県でも伊那谷の一部や小県郡がわりと早いようで、木曽谷や安雲野の奥は少し遅れています。茨城の一部に大日如来が寛永年間に初出している地域がありますが、これは特異な信仰圏です。また、初出する石仏は各市とも地蔵や庚申塔が多く、川口地域のように馬頭観世音が初出している市町村はめずらしいようです。もうひとつのグラフを見てもわかるように、馬頭観世音は地蔵や庚申塔と比べると初出は遅いのが普通です。ですから、川口地域最古（八王子市内最古）の楢原の馬頭観世音は非常に価値のある石仏と言えるでしょう。（東部町の馬頭はどちらかというと安土・桃山時代の石仏に含めた方がよいようです）

地域の石仏の特徴としてもうひとつ総数の多少が考えられますが川口地域の石仏数二百三十（道しるべ含む）は多いのでしょうか、少ないのでしょうか。同じ数だとしても造立時の人口・耕地面積等を考えた上でないとはっきりは言えませんが、少なくはないように感じます。いろいろな文献を探し出して考察する必要があります。

別にグラフがふたつありますが、これは地蔵・馬頭観世音・庚申

地　域	地　蔵	馬　頭	庚　申	その他の石仏で多いもの	合　計	初出石仏	出　典　文　献
東　京	841	194	234	32	1,861	地蔵	
八王子市	45.2％	10.4％	12.6％	三界万霊塔 1.7％	100％	1660 万治3年	
	38	41	17	4	126	地蔵	
立川市	30.2％	32.5％	13.5％	秋葉山供養 3.2％	100％	1669 寛文9年	立川の野仏をたずねて
	44	26	20	13	154	聖観音	
東村山市	28.6％	16.9％	13.0％	巡拝塔 8.4％	100％	1668 寛文8年	東村山の石仏と信仰
	24	32	48	16	210	地蔵	府中市の石造遺物
府中市	11.4％	15.2％	32.4％	三界万霊塔 7.6％	100％	1667 寛文7年	府中市郷土資料集3
	60	21	38	3	174	庚申塔	
多摩市	34.5％	12.1％	21.8％	念仏供養塔 1.7％	100％	1673 寛文13年	多摩市文化財調査資料（石仏）
神奈川	30	6	68	30	207	庚申塔	
大和市	14.5％	2.9％	32.9％	道祖神 14.5％	100％	1667 寛文7年	大和市の石造物
埼　玉	32	43	29	6	202	庚申石憧	
志木市	15.8％	21.3％	14.4％	回国塔 3.0％	100％	1648 正保5年	志木市誌民俗史料編Ⅱ石造遺物
	205	192	112	36	748	庚申塔	東松山市
東松山市	27.4％	25.7％	15.0％	巡拝塔 4.8％	100％	寛文8年	石造記念物調査報告石
茨　城	80	57	19	46	453	大日如来	岩間町史資料集第3号
岩間町	17.7％	12.6％	4.2％	二十三夜塔 10.2％	100％	1625 寛永2年	岩間町の石仏・石塔
群　馬	117	161	538	46	1,470	阿弥陀如来	
伊勢崎市	8.0％	11.0％	36.6％	道祖神 3.1％	100％	1626 寛永3年	伊勢崎の近世石造物
長　野	119	369	41	48	827	地蔵	
木祖村	14.4％	44.6％	5.0％	巡拝塔 5.8％	100％	1669 寛文9年	木祖村の石造文化財
	244	1,771	588	261	5,114	六地蔵石憧	
伊那市	4.8％	34.6％	11.5％	読誦塔 5.1％	100％	1623 元和9年	伊那市石造文化財
	75	143	31	137	693	馬頭観世音	
東部町	10.8％	20.6％	4.5％	道祖神 19.8％	100％	1601 慶長6年	東部町の石造文化財
山　梨	212	34	45	30	583	六地蔵石憧	
塩山市	36.4％	6.8％	7.7％	道祖神 5.1％	100％	1645 正保2年	塩山市の石造美術

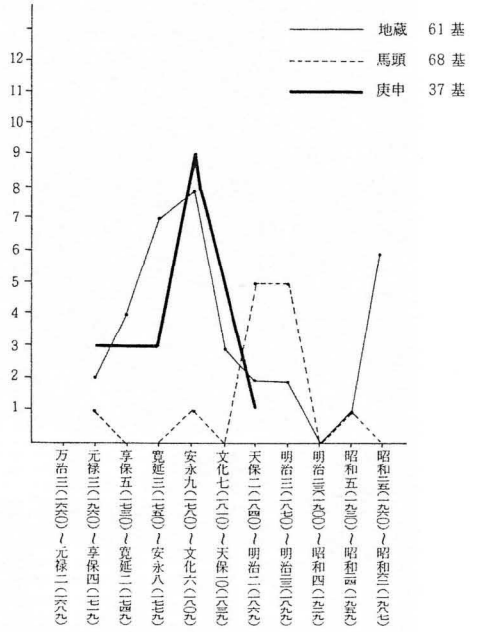
表１　江戸期における地蔵・馬頭・庚申塔等の割合および初出石仏表

地　域	地　蔵	馬　頭	庚　申	その他の石仏で多いもの	合　計	初出石仏	出　典　文　献
東　京 八王子 川　口	120 52.0％	14 6.1％	34 14.7％	5 三界万霊塔 光明真言塔 2.2％	231 100％	馬頭観世音 1691 元禄４年	
加　住	61 53.0％	6 5.2％	14 12.2％	4 塞念　供養 3.5％	115 100％	庚申塔 1700 元禄13年	
小　宮	78 45.6％	31 18.1％	22 12.9％	8 回　国　塔 4.7％	171 100％	阿弥陀如来 1675 延宝３年	
元　八	69 50.0％	14 10.1％	24 17.4％	3 聖　観　音 2.2％	138 100％	如意輪観音 1675 延宝３年	
恩　方	80 43.8％	22 12.0％	33 18.0％	6 二十三夜塔 3.3％	183 100％	庚申塔 1682 天和２年	
浅　川	59 37.1％	14 8.8％	20 12.5％	6 え　び　す 3.8％	159 100％	地蔵 1660 万治３年	
横　山	96 44.0％	31 14.2％	24 11.0％	6 徳本名号 2.8％	218 100％	石経塔 1686 貞享３年	
由　井	106 48.2％	28 12.7％	17 7.7％	6 光明真言塔 2.7％	220 100％	地蔵 1679 延宝７年	
八王子 (旧市内)	56 40.0％	6 4.3％	19 13.6％	15 題　目　塔 10.7％	140 100％	聖観音 1679 延宝７年	
由　木	116 40.6％	28 9.8％	27 9.4％	18 道　祖　神 6.3％	286 100％	地蔵庚申 1678 延宝６年	
五日市町	114 24.9％	83 18.1％	48 10.5％	42 巡　拝　塔 9.2％	458 100％	地蔵 1686 貞享３年	五日市の石仏 ふるさとの 精神風土を探る
奥多摩町	75 23.5％	41 12.9％	20 6.3％	19 二十三夜塔 6.0％	319 100％	薬師如来 1683 天和３年	奥多摩町誌資料集１ 奥多摩の民俗 －石仏・講・年中行事－
羽村町	32 38.6％	21 25.3％	5 6.0％	13 三界万霊塔 15.7％	83 100％	地蔵 元禄年間	羽村の石仏
瑞穂町	30 24.6％	16 13.1％	28 23.0％	10 回　国　塔 8.2％	122 100％	庚申塔 1689 元禄２年	東京都瑞穂町 文化財調査報告２ 石造文化財

川口地域

年代別（30年刻み）造立数

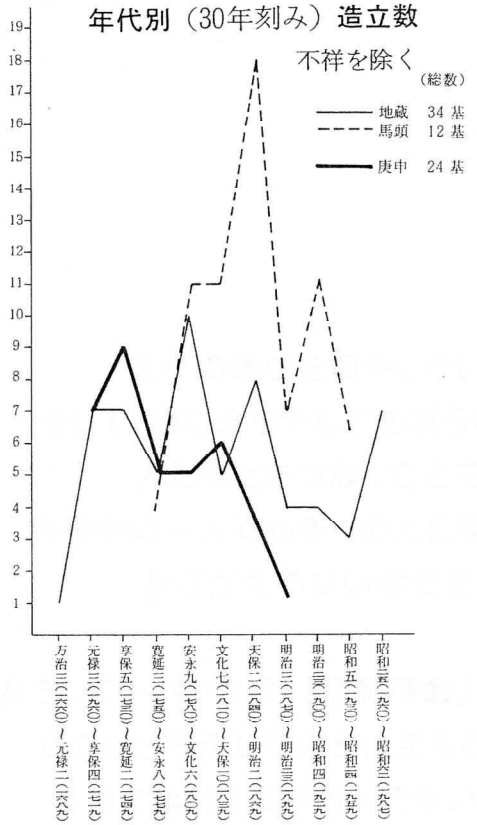
不祥を除く



五日市地域

年代別（30年刻み）造立数

不祥を除く（総数）



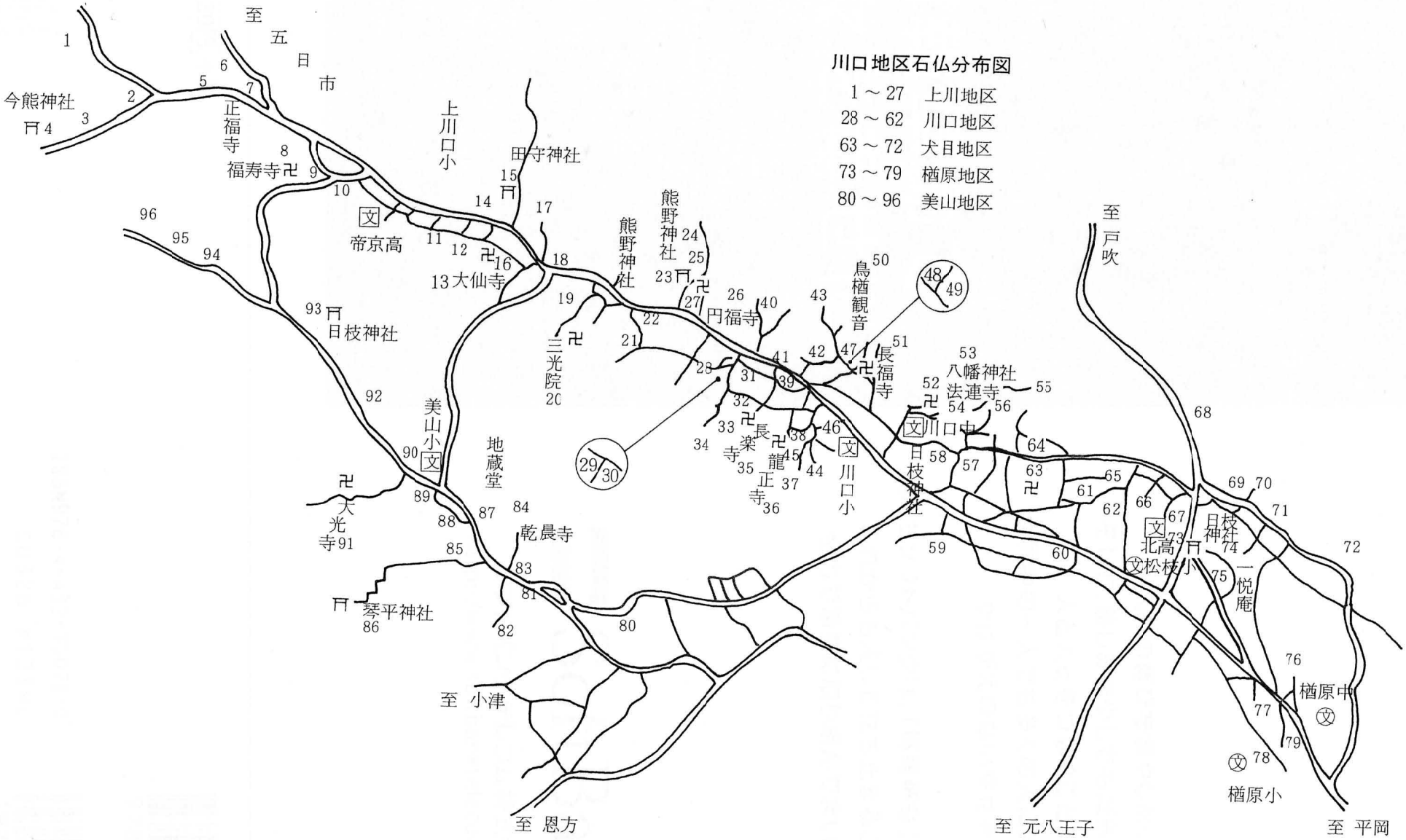
「五日市の石仏」より必要部分抜粋

塔のうち、年銘のあるものを三十年ずつ区切って集計したものです。川口地域と隣の五日市町で多少の違いはありますが、庚申塔は早く出て、馬頭観世音は入れかわるように出てくる。地蔵は早く出て、現代でも造立されているのがわかります。ただ、現代の造立は交通安全祈願であったり、以前とは願いがかわってきています。このように石仏は多くのことを語りたがっています。ですから、データを集計し、いろいろな文献を探り、考察する必要があります。

最後に、川口地域の石仏の特徴をもう一度書いておきます。比較のデータ等にまだまだ不備はありますが、地蔵が多く、馬頭観世音が少ない、初出は元禄期と遅く、数は少なくはないだろう、と今はしておきます。

この項が、川口地域の石仏をより詳しく知る為のひとつの資料となれば幸いです。

（多摩石仏の会会員）


川口地区石仏分布図
1～27　上川地区
28～62　川口地区
63～72　犬目地区
73～79　楢原地区
80～96　美山地区
至 五日市
今熊神社
正福寺
福寿寺
上川口小
田守神社
帝京高
13大仙寺
熊野神社
円福寺
三光院
日枝神社
美山小
地蔵堂
大光寺
乾晨寺
琴平神社
至 小津
至 恩方
鳥楢観音
長福寺
八幡神社
法連寺
川口中
日枝神社
長楽寺
龍正寺
川口小
至 戸吹
至 元八王子
北高
松枝小
日枝神社
一悦庵
楢原中
楢原小
至 平岡

上川の石仏

1	不動明王	光背	慶応三丁卯年三月
2	馬頭観世音（文字）	山状角柱	天保十一庚子十二月日
	地蔵	丸彫	
3	馬頭観世音（文字）	山状角柱	
4	今態大権現	灯籠	嘉永元戊申十一月吉日
5	青面金剛	笠付	
	地蔵（寒念仏）	丸彫	享保三年戊戌十一月十八日
	地蔵	丸彫	安永五丙申天八月吉日（薬師如来）
6	庚申塔（文字）	自然	文化三年丙寅仲春吉日
	地蔵	光背	
	宝篋印塔（寒念仏）	明和七庚寅冬吉辰	
	六地蔵	光背	天明八□□二月彼岸日
7	馬頭観世音（文字）	山状角柱	明治十八酉年七月十三日
8	六地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	昭和五十四年三月吉日
	如意輪観音	光背	
	三界萬霊塔	自然	
	青面金剛	（笠付）	享保十四丁酉天九月吉日
	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
	如意輪観音	丸彫	
9	地蔵	丸彫	
10	庚申塔（文字）	山状角柱	文化五辰初春
	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
11	廻国塔	箱型	
	六地蔵	丸彫	
	青面金剛	笠付	寛政四（享保十五年九月七日）
12	地蔵	丸彫	
13	地蔵（念仏供養）	丸彫	安永二発巳天九月吉日
	三界萬霊塔	箱型	
	地蔵	光背	
	地蔵	光背	
	地蔵	光背	
14	庚申塔（光明真言百万遍）	文字	文政三庚辰七月吉日
15	地蔵	丸彫	
16	地蔵（道しるべ）	丸彫	
17	青面金剛	笠付	
	廻国塔	角柱	明和五戊子年十月吉日
	地蔵	丸彫	明和元甲申歳九月吉日
18	庚申塔（文字）	自然	文政九丙戌八月吉日
	地蔵	光背	
19	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
	牛牛頭天王	灯籠	文政十二巳丑年七月吉日
	疫病宮	灯籠	――年十二月吉日
20	三界萬霊塔	自然	宝暦五乙亥天十月日
	地蔵（水子）	丸彫	昭和五十六辛　年十二月吉日
21	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
	地蔵（三射）	笠付	嘉永八辛亥年三月吉日
	如意輪観音	光背	文政八乙　三月吉日
	阿夫利神社	灯籠	明治十二年卯十一月
22	青面金剛	笠付	天明二年寅十一月吉日
	馬頭観世音（文字）	箱型	萬延元庚申年
23	疱瘡神（文字）	自然	文政五年春
	伊勢講碑（春日宮・八幡宮）	自然	天保七丙申年六月十五日
24	地蔵	丸彫	昭和五十年二月
25	弁才天	丸彫	
26	光明真言（百万遍）	笠付	天明二壬寅年八月廿七日
	地蔵（念仏供養）	光背	――年二月吉日
	地蔵（念仏供養）	光背	――戊午天八月吉日
27	青面金剛	板駒型	
	地蔵（奉供養）	光背	

川口の石仏

28	地蔵	丸彫	
	地蔵	丸彫	
	名号塔	六角柱	――九月十日
	塞念　供養塔	箱型	明和八年二月吉日
29	道祖神（文字）	寛政八	
30	青面金剛	笠付	享保十三申天十一月吉日
31	地蔵	丸彫	寛政元巳酉年九月二十九日
	六地蔵	角柱	
32	馬頭観世音（文字）	山状角柱	嘉永二酉年十月
33	青面金剛	笠付	安永九庚子年十月吉日

34 地蔵 丸彫 天明六丙午年八月吉日
倶利迦羅不動 丸彫 安永五年
倶利迦羅不動 丸彫 明治廿九年申十二月

35 六地蔵 丸彫
六地蔵 丸彫 文政五壬午年十月吉日

36 地蔵 丸彫 宝暦四甲戌十月日
青面金剛 板駒型
光明真言塔 丸彫
虚空蔵菩薩 山状角柱
六地蔵 丸彫 文化十四丑歳六月吉日
地蔵 丸彫 天明六丙午年七月吉日
阿弥陀如来 丸彫 安永二年十月吉日

37 三界萬霊塔 自然
38 地蔵 丸彫
勝軍地蔵 丸彫

39 地蔵 丸彫 文化元己巳八月日
不明 角柱

40 地鎮権現宝塔 孤状角柱
41 地蔵（寒念仏） 丸彫 宝永七庚寅天一月吉日
地蔵 丸彫 延享三丙年寅四月吉日

42 稲荷大明神 灯籠 宝暦十一辛巳十一月吉日
43 地蔵 光背 弘化二巳七月吉日
44 第六天王 自然 寛政九丁巳五月吉日
45 青面金剛（寒念仏） 笠付 昭和60年6月24日
46 岩船地蔵 丸彫 （天保十五甲辰年十一月）
47 六地蔵2 享保三戊戌十月十六日
青面金剛 昭和五十四年四月

48 地蔵 丸彫
49 地蔵 丸彫
地蔵 丸彫
地蔵（念仏供養） 丸彫 図永七戌十月吉日
50 地蔵 丸彫
石段供養塔 山状角柱 文化三丙寅
51 光明真言（百万遍） 山状角柱 安永八己亥十二月四日
52 地蔵3 丸彫

53 庚申塔（文字） 丸彫
庚申灯籠 丸彫
（阿弥陀）億百萬遍供養塔 丸彫
百萬遍供養塔 丸彫
八幡宮（山王宮） 丸彫
54 馬頭観世音（像） 板駒型
55 勢至菩薩 山状角柱
56 庚申塔（文字） 丸彫
百萬遍供養塔 丸彫
57 青面金剛 丸彫
58 地蔵 丸彫
59 六地蔵 丸彫
60 地蔵 丸彫
六地蔵（念仏供養） 丸彫
61 地蔵 丸彫
62 地蔵 丸彫

63 地蔵 丸彫
64 勝軍地蔵 丸彫
愛宕講供養塔 丸彫
65 馬頭観世音（文字） 灯籠
66 地蔵 光背
67 青面金剛 丸彫
庚申塔（文字） 丸彫
地蔵 丸彫
68 六地蔵 丸彫
青面金剛 丸彫
地蔵 丸彫
地蔵 丸彫
69 念仏講碑 自然
地蔵 丸彫
70 地蔵 丸彫
巡拝塔（聖観音） 山状角柱
（再立）（道しるべ） 丸彫
地蔵（女中夜念仏供養） 丸彫

犬目の石仏

文政四巳天十二月十二日
寛政七 卯年六月吉祥日
元治二年
天保六己未年八月吉日
天保二卯年八月吉日
弘化三丙午年四月吉日
文政四巳天十一月十三日
天保九戌年九月佛日
正徳四午天七月廿一日
明和九辰十一月吉日
明治十三辰年七月二十四日
文政十一戊子十一月十三日
（寛保元丙辰 九月廿四日
（享保元丙申

宝暦十三癸未天七月吉祥日
文政四辛巳十一月吉日
明治十七年四月十四日
正徳二年巳十一月吉日
元禄六年酉九月十九日
寛政五癸丑年十月廿二日

安永三年四月吉日
（明和二乙酉八日吉日）
昭和三十一年二月
——歳十一月吉日
文化十三子
天明四甲辰歳十月吉祥日

	地蔵	丸彫	年十月	
	地蔵	光背		
71	三界萬霊塔（結界石）	角柱	文政十一歳七月日	
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
72	光明真言（百万遍）	山状角柱	大明六丙牛禾千九月如意日	
	地蔵	丸彫	安永二巳歳七月吉祥日	

楢原の石仏

73	馬頭観世音（像）	光背	元禄四年	
74	青面金剛	笠付		
	地蔵	丸彫		
	稲荷大明神	自然	大正十一年	
75	六地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
76	地蔵	箱型		
	地蔵	丸彫	昭和十八年四月十五日	
	地蔵	丸彫		
77	青面金剛	笠付	――歳二月吉日	
	地蔵	孤状角柱		
78	馬頭観世音（文字）	皿状角柱	昭和十年	
79	六地蔵	丸彫	寛保元年辛酉八月吉日	
	（再建）	光背	（明治廿――八日）	

美山の石仏

80	青面金剛	駒型	享保十四乙酉天八月吉日	
	地蔵	丸彫		
	不明	駒型		
81	馬頭観世音（文字）	皿型角柱	慶　三卯年八月十四日	
82	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
83	庚申塚（文字）	自然		
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
84	阿弥陀如来	光背		
	六地蔵	丸彫	（昭和六十二年九月）	
	聖観音	丸彫	（昭和六十二年九月）	
	地蔵（三界万霊）	丸彫		
	地蔵	丸彫		
85	青面金剛	笠付	文化十癸酉十一月吉日	
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
	地蔵	光背		
86	出羽三山供養塔（大日）（順拝塔）	山状角柱	文化十一戌年四月八日	
87	閻魔（順拝塔）	丸彫	安政二乙卯八月八日	
	青面金剛	笠付	明和九壬辰十一月日	
	馬頭観世音（像）	光背	寛政三亥二月吉日	
	馬頭観世音（文字）	箱型	明治十一年一月廿一日	
	二十三夜塔（文字）	自然	文政七甲申仲冬	
	徳本念仏塔	自然	文政九丙戌十月	
	地　地	丸彫		
	地　地	丸彫		
	地　地	丸彫		
	地　地	光背		
	地　地	光背		
	地　地	光背		
	地　地	光背		
	不　明（念仏供養）	光背		
88	馬頭観世音（文字）	自然	明治十三辰	
	地蔵（三界万霊・□□供養）	丸彫	寛政四年	
89	如意輪観音	丸彫	寛政三亥年十一月吉日	
90	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
91	青面金剛	不明	寛保元辛酉天十月上旬	
	地蔵	丸彫	享和	
	三界萬霊塔	角柱	昭和五十四年七月十五日	
92	青面金剛	笠付		
	光明真言塔	自然	天保三壬辰年二月	
93	庚申塔（文字）	自然	嘉永元戊申三月吉日	
94	青面金剛	笠なし・笠付	安永九庚子八月吉日	
	地蔵	丸彫	天明八戊申歳正月十五日	
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
	地蔵	丸彫		
95	馬頭観世音（像）	光背	明治十年丑六月	
96	百萬遍供養塔	自然	嘉永五壬子四月吉日	